



## 【仕える者が幸いです。】

聖書；ヨハネの福音書13；1-5節、14-17節、暗唱聖句；ヨハネの福音書13；17

説教者：鄭南哲牧師  
(Rev. Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさん！一週間の間もお元気でしたか。

11月の最後の主日となりました。今年もここまで頑張ってきた教会の家族にまず、お互いに励まし合いませんか。

“今年もここまで本当にお疲れ様でした。”、“あなたは私にずっと大切な存在です。”今年もそれぞれ任された事に、神様の栄光と神様の国と主の教会のために精一杯仕えて来た、みなさんの上に神様からの大いなる慰めと祝福がおとずれますように、そして残りの後1ヶ月にもさらなる神様の恵みと助けによってすごせますように、主イエスの御名によって祝福します。アーメン！

## &lt;1. 待降節(アドベント)の意味&gt;

待降節(Advent)は‘来る’、‘到着’を意味するラテン語‘adventus’から由来された言葉です。これは最初はキリストの初臨を意味し、聖誕の時だけ使われていました。それが今日は主の誕生を前もって準備するクリスマスの前の四週間を意味となり、それだけではなく、待降節のほかの名称(めいしゅう)として待臨節(たいりんせつ)、降臨節(こうりんせつ)などともあります。地上のすべての教会は聖誕までの四週間を待降節(アドベント)と言われ、敬虔に過ごしています。待降節というは我々に来られる救い主イエスの誕生を待ち望む時期です。もちろんイエス様は2千年前に来られました。その初めの御誕、聖誕を言います。この人類の歴史の中に実際イエス・キリストが人間の姿を持って‘来られた’のは待降節の初めの意味であり、とつても大切な意味を含んでいます。一度実際‘来られた’神の御子イエスキリストご自身はまた再び来られると約束されました。一度この世に来られたイエス様を信じ、毎年アドベントを過ごしている者たちはまたその主が約束通りに必ず再び来られる主の再臨をさらに信じ待ち望む事になり、キリストへの信仰と期待感を増し加える時になります。

そして神様の子として人間の姿を持って来られたイエス様は人類を罪を赦し、救うためにご自分を十字架に明け渡しました。この感激が二つ目の待降節の意味をもたらします。

二つ目は、待降節(アドベント)は‘その主が来られる’という意味を持っています。‘来られる’のは現在に含まれていて、当時だけではなく、今日でもいつでもイエス様を信じ受け入れる者にはその人の心にイエスキリストが来られるからです。イエス様の初臨というのは歴史の中で起こった事実としてすべての人のための客観的なものであるなら、この二つ目の意味である来られるのはとつても個人的であって霊的なものです。人類のための神様の救いが、私にまで訪れたという事実を信じる瞬間、我々はその主の愛と救いを受け入れ、感謝せざるをえないと思います。

三つ目の待降節の意味は‘将来に再び来られる’という意味が含まれています。つまり、一度すでにこの地に来られたイエス様はその日とその時はだれも知らないですが、ふたたびかならず来られると約束された(マタイ24:36)通り信じ、待ち望む時である意味にもなります。以前使徒の働き講解中にも話しましたが、たしかな事実は将来のある日來られるイエス様は力のない赤ん坊の姿ではなく、世をさばかれる王の王として必ず来られることです。(黙示録22:20)

その再び来られるイエス様をだれが待ち望むことができますか。2千年前に来られたイエスキリストを心に受け入れ信じている聖徒だけが待ち望むことができます。待降節(アドベント)の時は三つ目の意味覚え、やがて来られるイエス様に対する望み、希望、信仰が私とみなさんに満ち溢れる時でもあります。むかし、ベツレヘムでお生まれになったイエス様を現在我々はもう一度心に救い主として受け入れ、かたく信じ、やがて来られるイエス様を待ち望む信仰の姿勢を持って過ごすべき時期でもあります。イエスキリストはこの地にすべての人々に罪から離れ開放させるため悔い改めと赦しの恩寵を与えるために来られました。信じる人々に神の救いと真の平安の機会を与えるために主イエスキリストは来られたのです。今年のアドベントの時期がみなさんにこのような主の豊かな恵みの季節となりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン。

## 【アドベントの祈り】

春を待ち望む冬のように、心の貧しい人々はみな  
再び来られる主を待ち望みます。

飼い葉おけのように、汚れた心を空にしてきよめ  
再び来られる主を待ち望みます。

主だけにささげる贈り物を用意し

再び来られる主を待ち望みます。

利益だけを追い求めていた目を閉じ

再び来られる主を待ち望みます。

握りしめていた手を開いて組み合わせ

再び来られる主を待ち望みます。

高ぶりを砕いてへりくだり  
再び来られる主を待ち望みます。  
騒がしい笑いを捨て、悔い改めと涙をもって  
再び来られる主を待ち望みます。  
失われた信仰の始めの愛を取り戻すために  
再び来られる主を待ち望みます。  
ひそかに捨てた私の十字架を再び負い  
再び来られる主を待ち望みます。  
イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン！

## <2. 救い出された人の人生は仕える人生です。>

今日は祝福シリーズの3回目のメッセージとして仕える者が幸いである事を共に学んで行きたいと思います。アドベントの始めの週として、この世に来られたイエスキリストの‘まことに仕え’の姿を通して下さる祝福と一緒に学んで行きたいと願います。

今日の本文はあの有名な場面です。イエス様が弟子たちの足を洗っておられる場面です。十字架を背負う最後の瞬間までイエス様の心を支配していた有－(ゆういち)な関心事はご自分の死や苦しみなどではなく、愛する人々への仕えることでした。仕える姿はイエス様のきよい習慣だったのです。今日の本文でまず、一緒に考えてみる場合があります。はたして、イエス様が弟子たちに仕えてことは今回だけの一回性イベントだったのか、まことのイエス様の人生のスタイルだったのかです。

ヨハネの福音書13章1節をみてみてください。“さて、過ぎ越しのまつりの前に、この世を去って父のみもとにいくべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。”イエス様は弟子たちをどれぐらい愛されましたか。“その愛を残るところなく示された”そうです。‘残るところなく’愛されたことが自然に仕える姿で表わされたのです。すると、イエス様ご自身は仕えることに対してどのような心構えでおられたのでしょうか。

よく知られているマルコの福音書10章45節を読んでみましょうか。

“人の子が来たのも、つかえられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。”ここで“人の子が来たのも”という表現はイエス様の使命を表わしています。いつかイエス様の伝道の習慣について話した時、この地に来られたイエス様の一番大切な使命は失われた魂を探し出して 救うことであることを申し上げました。

ところが、今日の箇所によるとイエス様のもう一つの使命は仕えることだったと言った方が正しいと思います。しかし、みなさん、救いと仕えることは切り離されるものでしょうか。ここで、救いと仕えることは結局一つであることがわかります。

愛する信仰の家族のみなさん!仕えることの核心はなんでしょうか。

仕えることとは結局、仕えられる対象に対して最善の有益(ゆうえき)を求めることではないでしょうか。

主イエスキリストは人類に対する最善の有益は救いであることをご存知だったのです。

そういうわけで、我々に仕えて、救うためにご自身の命をあがないのいけにえとしてささげようとしたのです。

もう一度、マルコの福音書10章45節を黙想してみましょう。

“人の子が来たのも、つかえられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです”

そうです。イエス様が来られた目的は仕えるためでした。仕えることの絶頂(ぜっちょう)がまさにご自分の命をささげられたことであり、そして、その結果が人類の救いだったのです。

しかし、仕えることとは命をささげるほどの大したことだけではなく、些細な事でもできることをイエス様は弟子たちに教えるしなければなりません。そういうわけでタオルと洗面器をもって弟子たちの足を洗われたのです。

小さいものに行った些細な事も命をささげることと等しく大切であることをイエスご自身が実際に教えてくださったのです。年寄りの方々が2階に上げられるとき、支えてあげたり、荷物を持っていれば、持ってあげたり、子供たちをかえりみ、教会の奉仕の面においても人々があまりやりたがらないことを喜んでやり、教会に新しく来られた方々にあたたかく案内し、フォローしてあげるなど、小さいことの実践から仕えることは始まります。

## <3. 仕えることの見本となってくださったイエス様>

本文を注意深く読んでみるとイエス様は弟子たちの中でだれかが足を洗ってあげることを待っていたかのように見えます。

足を洗うということは一般的にユダヤ人の慣習によると、サンダルを入っていたころ、ものすごく、あつい砂漠ではお客さんへの礼儀でした。家の門のそばに水がめとたらいを用意しておいて大切なお客さんが来ると洗ってあげることが最善

の仕えることだったのです。ところが、弟子たちの誰ひとりにもそれには気を使わなかったのようになります。  
ヨハネの福音書13章2節は“夕食の間のことであった”と書かれています。実際、足を洗うことは夕食の前に行われるべきのことでした。ですから、もしかすると、イエス様はそれまでに弟子たちの行動を待っておられたかもしれません。しかし、弟子たちのほうから、なんの行動の気配(けはい)がなかったため、イエス様は夕食の途中(とちゅう)で起き上げられました。当然、夕食はまだ、終わってないままだったかも知れません。

しかし、イエス様はさきに、急いで、食事をすませて、この大切なチャンスを見逃しませんでした。そして、この実行の後、イエス様は自分の本音を表わしてくださいました。“わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範をしめしたのです。”(ヨハネ13:15)

イエス様の実践というのは‘模範(example)’でした。‘模範’の意味はなんですか。だれかが、おいかけてくるようにすることではありませんか。ここでだれかはだれでしょうか。イエス様の弟子たちではないでしょうか。弟子というのは‘従って行く者(follower)’という意味です。

ですから、自分がイエス様の弟子だと思っているのであれば、その方の模範に従ってやることは当然のことではないでしょうか。しかし、なぜ、そういうふうにはできないのでしょうか。つねにあきらめられない 自己中心的でな自分の思いのためではないでしょうか。イエス様を我々が信じているのであれば、我々はみなクリスチャンであり、そしてキリストの弟子だともいえます。

そうであるなら、私達も小さいイエスとなってイエス様が表わして下さった模範に従って生きるべきです。

第一ペテロ2章21節をみてください。「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」

その中でも、今日の御言葉によると、イエス様が表わして下さったように仕えることはイエス様のきよい習慣としての模範でした。

#### <4. 仕えることを可能にされた謙遜>

##### 愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!

イエス様は軟弱な弟子たちに仕えるためにご自身がひざまずく謙遜を表わしてくださいました。

イエス様の姿には真の謙遜がありました。この地上での馬小屋での誕生から、十字架につけられて死なれるまで謙遜が秘められていました。今年一年間みなさんにとってどんな日々でしたか。

荒野のような苦しい時間もあつたでしょうか。荒野のように先が見えない時もあつただろうし、自分の人生があまりにも暗くて 明日が来ないような絶望もあつただろうし、周りには自分を励ましてくれるだれもないような寂しさもあつただろうし、荒野で 豊かに食べたり、飲んだりすることがとうてい大変なことのような経済的な苦しみを通って来た方々もいるかも知れません。 砂漠にある毒サソリなどが人に危害(きがい)を加えるのように自分に傷つけさせたり、苦しませるような恐ろしいこともどれほど多かつたのでしょうか。

旧約聖書申命記8章2節を見ますと、我々にある時こんな荒野のような人生を歩ませられたのは我々に向かって神様の一つの尊い目的があつたことが分かります。

“あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであつた。”

(英語の聖書でこの箇所を見てくださいよ、もっとその目的が明確になります。(Remember how the LORD your God led you all the way in the desert these forty years, to humble you...;Verse3:He humbled you!)

つまり、神様は神の民イスラエルたちを荒野の時間をゆるして下さつたのは我々を神様の御前でへりくだらせるためであり、謙遜を教えるためであつたことが分かります。

愛する神の家族のみなさん！人間の最大の問題は高ぶり、高慢なのです。高ぶりの人は仕方がありません。教えられません。なぜなら、自分が神のようだからです。すべての人を裏で自分が判断し、すべてのことに自己中心で、自分の心、思い、経験、自分の基準で合わせようとする高慢が我々にあるのではないのでしょうか。

神様はイスラエル民たちが自分たちの望み、願い、思い通りにならなかつた時、絶えずつぶやきながら恨んだり、不平不満を出したため40年間荒野での厳しい訓練をさせたのです。そうだったのにもかかわらず、多くのイスラエル民たちは徹底的に 自分を探らず、結局その不平不満、恨みの姿勢を捨てられなかつたため約束の地カナアンに入ることができませんでした。 ちょっと神様ってひどいのではないかと思われませんか。

しかし、愛するみなさん！よく考えて見て下さい。どうして私達には感謝より恨みが、不満をつぶやく時が多いと思いますか。そうです。我々の心の奥底にまだまだ完全に捨てられてない自己中心の高ぶりがあるからです。

相手が、他の人々が、周りの環境が、すべてのものが 自分の思い通りに、自分の願い通りになってほしいのに、そうなってくれないことにいらいらしてしまいます。感情的になり、神経的になってしまいます。ですから、感謝って言う、恵みって

言う言葉は知っているだけで、実際の自分の心と生活にならず、失っているのではないのでしょうか。そのような人々は表ではたえず自分の長所と他の人の短所を比較しながら、自分がかかなり偉そうに考え込んでいるが、心の奥底では自分の短所と他の人の長所を絶えず比較しながら自分をますます苦しませていってしまいます。そのような人は決してへりくだって仕えることができません。神様は人にあるその高慢を打ち破り、謙遜を教えるために時には、荒野の道を歩ませてくださいます。どうしてですか。人って苦痛と試練にぶつかった時こそ、神様の御前で自分を低くさせるからなんです。自分の限界にぶつかった時こそ心から切に神様を求めることになりますから。ようやく自分を探ることになります。どうしてもできない時やっと心から主をより頼むことになります。

神様は我々が多くのことをするより、根本的に変えられることを望んでおられます。まことの神様の人はいエス様のように柔和で、自分を低くし、謙遜した者です。自分を低くし、謙遜な人だけがイエス様のように仕える人生を送ることができます。愛する信仰の家族みなさん！仕えることは選択肢ではなく、主の命令なのです。自分がやる気がある時、時間の余裕がある時、気分がいい時やって、そうじゃない時はやらなくてもいいや！っとすることではありません。主イエスキリストが直接模範として見せながら、我々もそのように従えるように命令して下さったことでした。

**ヨハネの福音書13章13-14節をみてください。**

「あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。」

みなさん、仕えることはイエスキリストを主として告白する人々への神様の命令です。そうするのであれば、我々の選択は一つです。主なる神様にどうやって従うべきなのかだけを考えることです。もっと持っているものが、少なく持っている人々に、もっと強い者が強くない者に、便利に暮らしている者がそうでない人々に 仕えることは聖書的な原則です。‘私はすでに引退したのだから..’と思われる年寄りの方々もいるかも知れません。

いつかみなさんにも申しましたが、引退(retirement)の本来の意味は“タイヤを新しく取り替えてふたたび走る”という意味です。ですから、まだ健康であるならば、その健康と人生の知恵をあなたがたを必要としているところに行ってもう一度、仕えてみませんか。

すでに2015年11月の最後の主日です。そして今年12月の感謝と恵みのクリスマスシーズンを迎えようとしています。我らの主イエスキリストは天の王座を捨てて、しもべのようにこの地に来られました。そして、神様の御子イエスキリストがご自分のすべてを与え、その方をしたう弟子たちに仕えるようにと命じておられるのであれば、我々も救い主イエスキリストが来られ、たましいの救いのために惜しまずに仕えて下さったように我々も教会ら外套(がいと)をぬいで、タオルをもって仕えようと思いませんか。これからののこりの人生、仕えられる者ではなく、仕える者として生かしてください。という決心です。

**アッシシの聖者とと呼ばれていたフランシスコ(Francis)がラベルナー山でささげた有名な祈りはいまでも残って伝えられています。“主よ。私は主のように仕えながら苦しみを受けたことはありません。私の体にはくぎの痕(あと)がありません。私にも主の苦難を知らせてください。”**どれだけ切に祈ったのか、神様は彼の祈りの答えとして彼の手と足に5箇所のかぎの痕ができたそうです。

それでは、みなさん、今年ここまでの一年間をしばらく振り返って見ましょう。そして、みなさんの手と足を見てみてください。今年みなさんが歩んできたままの座にどんな跡(あと)が残っているのでしょうか。もう一度、我々の御前でひざまずいて仕えて下さったイエス様を見上げましょう。そして十字架につけられるほど、私たちを愛し、仕えて下さった手と足、イエス様の御体(みからだ)をもう一度覚えましょう。

今年の間、感謝だったことも、失敗し苦しかったこともすべて主の御前でおろしましょう。そして、新たな気持ちでこの始まったアドベントの時期からもう一度、主の手足、心臓となって、謙虚(けんきょ)に主に仕え、主の教会を仕え、人々に仕えるみなさんとなりますように祝福します。イエス様のように魂を愛し、救いのために仕えて下さったその姿を我々にも身につけて、始まる12月に神様の栄光を表わしていくクリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。 アーメン！